

総長としての大学改革での経験をもとに 土木学会に貢献をしていきたい。

丹保 憲仁 Norihito TANBO

土木学会第89代会長

【聞き手●本誌編集委員会委員長：三木千壽（東京工業大学教授） 2007年6月17日 札幌市でインタビュー】

北海道で育ち、札幌での高校時代は野球と山登りに熱中。北大の80周年を機に衛生工学科ができたことから、専門に、フロリダ大学に留学し、化学を学ぶ。36歳で教授、そして北大の総長になり、さまざまな大学改革に取り組む。そうした経験をもとに、土木学会にも多少の貢献はできるのではと謙虚に話す。土木はエンジニアリングのオーガナイザー。若い人にはスケールの大きな土木屋に育って欲しいと、熱いその思いと併せ語ってくれた。

野球と登山に熱中していた高校時代は、まさにバラ色の青春時代。

●会長は、いわゆる土木工学とは少し違った形の幅広い研究をされてきていますね。そのへんで、自己紹介や経歴を兼ね、これまでどんなことをやってこられたのかというところから、お話を聞えますか。

丹保 経歴からお話いたしますと、生まれは、北海道の稚内から列車で30分くらい南に下がった、温泉がある“豊富”というところですよ。小学校に入るまでは、親父が宗谷で小学校の校長をしていた関係でした。

当時、一帯は泥炭層で、茶色の水しかありませんでした。飲み水だけは、学校と駅長さんのところだけ、車で一日何回か水を運んでくるのです。それを一斗缶、いまでいう20リットルでもらってくるのですよ。ですから、風呂なんかは水が茶色で、私は小さい頃は、水は茶色だと思っていました（笑）。

●それが衛生工学を専門にした、会長の研究の原点だったわけですね。

丹保 結果として、それが専門になりましたね。そして、小学校に入学するわけですが、先ほども言いましたように親父が小学校の校長さんだったものですから、自分の息子を自分が教えるのはいやだし、自分のところの先生たちが教えるのもいやだといましてね。それに、この子を田舎に置いておいたらいいことはない、親父自身が札幌に出てきてしまったのです。それで私も札幌の師範学校の付属小学校に入れられました。

田舎からポッと出てきて、付属小学校といういわば特殊な学校に入れられたわけです。こちらはそういうことをまったく気にしないタイプですから、いじめにもあわず、楽しく小学校時代を過ごしました。

そして、中学1年の時に太平洋戦争に日本が負け、終戦を迎えました。ですから軍事教練をやった最後の中学生だったのです。学校は、旧制札幌一中で、現在は道立札幌南高校となっています。ちなみに、今年の夏の甲子園に16年ぶりに出場しましたので、校名を記憶している方もおられるのではないのでしょうか。

旧制札幌一中の3年の時に、新制高校に変わりました。それで新制高校1年になったわけですよ。高等学校の受験などありませんから、結局同じ学校に6年いることになりました。旧制中学は進んでいまして、新制高校になると教科書のレベルが1年半くらい落ちるのです。数学なんかは、旧制中学で習ったことをまた、新制高校で習うわけですよ。ですから受験もなく、まったく天国で、ほとんど遊んでばかりいました。高校時代はまさにバラ色の青春時代で、野球と山登りばかりやっていましたね。

ところが、高校3年になったら、進駐軍が突然男女共学にするっていうのです。それで札幌に東西南北4つの高校ができて、私は東高校というところに最後の10か月だけ行きました。ですから、私は東高校の一期生でもあるのですよ。

造船をやりたかったが、とても東京に転入できる状態ではなく、北大に。

●大学ではなぜ土木に進まれたのですか。

丹保 本当は船が好きで造船か、そうでなければ法学をやりたかったのです。法学なら、戦前抵抗をした先生のことを知っていましたので京大。造船なら東大、阪大、九大しかありませんでしたので、東大などへ行くことを考えていました。しかし、当時は食べるものもなく、北海道から出られるような時代ではありません

でした。弟も続いていたので、北大ならいいが、東京なら転勤しなければならないと親父が考えていたようです。しかも、当時東京は350万人という人口制限を行っていました。とても転入できる状態ではありませんでした。そこで北大へ行くことになったのです。

大学へ入って1年生を終えると、どこか専門にいかねばいけねい。そこから、土木屋になることが始まるのですが、僕は山登りが好きで山岳部でしたから、地質へ行こうか林学へ行こうかと思っていました。山を歩けると思ったからです。

石狩川に旭橋という橋梁があるのですが、その橋を設計してつくった戦前の勅任技師さんの家に、子供たちを集めて「どんぐりクラブ」というものをつくり、そのかしらになって、中学生に勉強を教えたり、遊んだりしていました。そのお父さん技師が、商売で歩く山と遊びで歩く山は違うよと、土木がいかに良い仕事かというのをこんこんと2日くらいとくのですね。もちろん、機械とか電気なら行く気はなかったのです。部屋の中でコツコツやるのは好きじゃありませんでしたから。土木屋だったら、ゲートル巻いて地下足袋はいて、外を歩けますし、悪くはないなと思いました。

造船がやりたかったこともあり、始めは港湾土木をやろうと思っていました。しかし土木へ入って、卒業論文はダムのスピルウェイでした。就職では、先生からは国鉄に行けといわれましたけど、私自身としては当然のように建設省に行くつもりでした。

ところが運命と言うものがあるものですね。大学4年の時がちょうど、北海道大学の80周年だったのです。80周年の時に、時の文部大臣が来て、北大に衛生工学科をつくるという、いわば引き出物を持ってきたのです。私はたまたま河川をやっていたものですから、学部長だった指導教官の大坪先生に呼ばれて、「今度衛生工学科ができることになった。きみにその要員になって欲しいと思っているがいかがか」と言われたのです。当時、教授から言われたら、良いも悪いもないですね。お前、大学院へ行くのだらうというから、はいと言ったら、有無を言わせず、衛生工学科の要員にされてしまったのです。

北大に全国初の衛生工学科ができ、そのカリキュラムづくりを任される。

●それで衛生工学を専門にすることになったのですね。

丹保 大学院では河川の教室にいて、マスターを修了したのですが、衛生工学を知っている人間なんて当時誰もいないのです。唯一、北大の古い教授で学部長もさ

れた倉塚良夫先生が衛生工学の大先達で、浄水工学という本を1943（昭和18）年くらいに執筆され、戦後倉塚先生がなくなった後、大坪先生の手で出版されたものがありました。これは戦前の日本の衛生工学が到達したひとつの頂点です。すばらしい本で、いまでも昔のことを考えるときには見えています。

その大坪先生からお前調べるといわれて、午前中は大学で講義聴いて、午後は、GHQの図書館であるアメリカ文化センターへ通いました。そこは敗戦後の日本の大学とは別天地で、外は寒くてもなかは赤々とストーブがついていて、アメリカ中の大学のアルマナックが置いてあるのです。当時はコピー機なんてありませんから、そこで衛生工学に関する記述を全部書き写し、学校へ帰ってガリ版を切るということをやっていました。

そうしたら、「キミひとつカリキュラムを考えてみる」というのです。これには驚きました。また、別の先生から、衛生工学を出ても就職がないかもしれないから、土木も半分入れろということもいわれ、それで自分でカリキュラムをつくることになったのです。

衛生工学では北大が第1号で、1年遅れて京大でも誕生しました。東大では建築と土木で引っ張り合いが起こって衛生工学がつかれず、2年遅れて都市工学科ができました。本格的な環境工学科が出来たのは阪大で、10年遅れました。

そんな訳で衛生工学科ができましたが、誰も教えるものがないので、マスターを終えたら途端に講師になりました。何もわからず、始めましたが、その時の1期生、2期生、3期生みんな伸びまして、東京都の水道局長、横浜や札幌の水道局長、下水道局長、名古屋の下水道局長など、日本中の水道局長や厚生省の部長級の要職についています。タイミングが良かったのですね。何にも知らない時に、僕らに習ったとんでもなく気の毒な学生たちが、実質的に戦後の日本の衛生工学を担ってしまったのです。

化学を勉強しにフロリダ大学に留学し、3つのショックを経験。

●衛生工学ではどのような勉強をなさったのですか。

丹保 私は大学院の時、半分医学部に預けられて、衛生学と細菌学の勉強をしました。

そして、いろいろ勉強して、研究を始めた時に、凝集という、水に薬を入れて塊をつくって沈殿させるといった技術の勉強を始めました。しかもそれを物理的な攪拌と組み合わせるといふ physico-chemical

hydrodynamics という新しい学問を始めた訳です。ケミカルエンジニアリングが、世界で始まりました。1955 年頃です。私はそれを学位論文にしました。その時に、コロイド科学（化学）を知る必要があったので、少し物理化学の勉強をしました。日本語でいえば膠質化学というのですが、その学会に、先生に頼んでしばしばに行かせてもらいました。ところがちんぷんかんぷん。何を聞いてもわからないのです。こいつはどうにもならないということで、アメリカのフロリダ大学へ化学を学びに行くことにしました。

フロリダ大学は、衛生工学ではアメリカでも有数の大学ですが、そこでは衛生工学ではなく、膠質化学、物理化学を勉強しに、化学科へ入ったのです。ですから、私は結果的に、医学部と物理化学と、流体力学というその三角形の中で、自分の研究をやってきたことになります。すべて我流でしたが、アメリカで Black という先生のもとで、少しばかり習って勉強の格好にしたのです。

アメリカ留学では、3つのショックがありました。1つは、ある日、フロリダ大学の前の本屋に行ったら、Levenspiel という人の書いた「Reaction Engineering (反応工学)」という本を見つけたことです。それを見ましたら、あるものとあるものが化学反応をし、たとえば、石炭が燃える時に表面に灰ができますが、灰を通して酸素が入り、中で石炭が燃えてそれが炭酸ガスになります。そういったことのモデルが見事に書いてあるのです。それを見まして、本当に腰を抜かしました。こんなきれいな学問ってあるのかなと。

そして、2つめは、Bird という人の「Transport Phenomena (輸送論)」という本です。流体力学の式は、運動量輸送で、濃度拡散は物質輸送です。それから熱輸送がありますが、全部同じ方程式なのです。拡散係数がみな同じなのです。ですから、私は流体の運動を勉強していましたが、それが熱伝達学の方式だったり、物質輸送だったりするという統一理論としては知らなかったのです。それを見て、2つめのショックを受けました。

3つめのショックは、ロシアの科学アカデミーの副総裁に 30 代でなった Levich という人の書いた、「Physicochemical Micro-hydrodynamics (物理化学的微小流体力学)」というタイプで打ったロシア語の翻訳本でした。かなり誤りの多い本でそれを使う時は全部式を自分でさならなければならないのですが、その中に乱流で、Isotropic Turbulence (等方性乱流論) というものがあります。僕はカルマン・テラー流の乱



丹保憲仁 会長

流論しか上木では習っていないのです。それを使って自分の研究をいくらやろうと思っても解けません。Heintz という人の Turbulence という乱流の定本のようになっているすばらしい本があるのですが、それにも書いてあるのですが、Levich の本を読みまして、乱流の構造を単なる相似法則、マイクロスケールで表現するのですね。それでまた腰を抜かしました。私はアメリカに 1 年ちょっとの間、その 3 つの本の狭間で、夜はほとんどその本を読んで過ごしました。

それはおそらく、私のにとって人生最大の転機だったでしょうね。

土木学会は狭い 専門家集団であって欲しくない。

●すばらしい経験ですね。そういうエキサイティングなことを、いまの若い人はなかなか経験できないでしょうね。ところで、会長は、これまで北大の総長という要職を務められてきたわけですが、総合大学の総長を務められたあとに土木学会の会長になった方は初めてです。大学全体を見られてきて、そういう立場から土木学会を見ると、どんな感じですか。

丹保 私はフロリダ大学に行った時に、日本の大学とのあまりの違いに驚きました。

このままいったら日本はだめになると思いました。それは私が29歳の時です。その時、なんとかしなければいけないと思ったのが後に総長になるドライブフォースです。

自分の学問はいろいろやりました。しかし、日本の大学はこんなことをやっていたら、だめになると思いましたね。たとえば土木であれば土木施工法なんていうのは、僕の先生は本当にいい先生でしたけど、土曜日朝、1講目と2講目、手がだるくなるくらいノート取らされるわけですよ。

土木の仲間が局長になった連中はいっぱいいます。そういう連中は私を土木屋だと思っていないのです。あいつは化学屋ではないかと思っているのです。一方、アメリカの友達は私のことをみんな化学工学屋だと思っています。ですけど、私は土木屋だったですね。中学からの一番の親友が群馬大学の学長をやっており、彼は化学を専門にしているのですが、それが僕がある年になって書いた論文、30台から40台の論文をみて、「お前は化学を知らないからああいうことを堂々というのだ」と言うのです。すごいことをお前はやったけれども、化学を知っているやつはあんなことをいわないと言うのです。ということは、土木屋なのですね。

私自身は、化学を道具だと思っています。化学屋さんには化学をやっています。私は水質工学をやっているが、水質の中の化学は道具だと考えていました。化学という道具を、どうやって国土空間を切り分ける

か、どうやって都市システムを切り分けるかということに使ったわけです。ですから、土木屋であったということは私にとって、幸いであったと思います。土木屋というのは、おそらく大学で化学については、何にも習っていないと思うのですよ。せいぜいが流体力学と構造力学、いまだったら地盤工学でしょうか。

その3つくらいは学問の素形で習っていますが、あとはみんな応用学ですよ。学問の基礎も習いましたが、それ以上にどうやって物を見るかということ徹底的に習いました。総長になったのもそういった延長にあったと考えています。ただ、私のこれまでの経験から、やっぱり土木学会というものが、希望としてはあまり狭い専門家集団であって欲しくないなと思いますね。そして、そのように土木学会が展開することに対しては多少貢献ができるかなとも思っています。

北大の総長時代はずっと トータライズすることを考えてきた。

●留学以降、北大の総長時代までどんなことをなさってきたのですか。

丹保 29歳の留学の時から大学はこのままではしょうがないと思っていました。その後、教授になり大学紛争に巻き込まれました。教授に4月1日なって、4月10日に大学が封鎖されましたから、いわば紛争対策用の教授のようなものです。36歳で一番若い教授でしたけどね。ひどい目にあいました。それで何とかしなければいけないと思い、いまならもっと上手なことも言ってお交もやったのですが、すぐ選挙されて、教室主任になってしまったのです。当時は、教授主任まで選挙する、そういう風潮でしたから。そして、団交で最初に倒れたのは私なのです。37時間団交をやり、まだ大丈夫だといったら、当時の学生委員をやっている先輩の教授がお前倒れろというのです。

それで医者が派遣されてきて、これだめだからとうことで、大学から出されたのです。もちろん、ぴんぴんしていましたけどね。

そういう経験を踏み、大学紛争が終わり、いろいろなことをやりました。しかし、大学は何にも変わっていないのですよ。こんなことではしょうがないと。要するに学生の騒ぎ方も悪いけど、大学も悪い。そう思って、いろいろなことを考えました。そして、卒業論文を全部公開して、ディスカッションをやると決めたのも、私の提案でやりました。

そういうことを次々やっているうちに、だんだん大学の中核に引き込まれて一番したくない、死んでもし



学会誌編集委員会委員長 三木千壽

たくないと思った学生部長に学長からなれといわれ、大分抵抗したのですが、とうとうさせられてしまった。それが運のつきで、すぐ工学部長になりました。

工学部長の時、大学院重点化の問題が起こって、それを私の手元でやったのですが、その時にダブルメジャーで学科をなくしたいと。それで、主専修、副専修という課程をつくって、2つのメジャーをとらなければマスターにしないと。もうひとつとらなければドクターも終われないというシステムを日本で最初につくったのですが、それも20年来頭の中にあたためてきた構想です。教授主任の時代からみなさんに申し上げていたことを、やったのです。

そうしたことで、総長にも、なりたくてなったというよりも、自然になったという感じです。しかし、大学院重点化が進みながら、学部教育というのは依然として学部段階での完成教育なのです。そんなことをやっていたら、重点化なんてやっても意味がないのです。学部というのは、基礎教育と、いわゆる昔教養といったようなものを4年間でしっかりやって、そして大学院で専門教育をやればよいという、アンダーグラデュエートカレッジでいいという議論をさせていただきました。ですから、トータライズすることばかりをやってきました。

そういう意味では、土木であったということが、良かったと思います。土木屋というのは何でもやらなければいけないですね。広い意味の専門はないかわりに、トータライズすることが求められる。そういういろいろな意味で僕は土木屋であってよかったと思っています。ずいぶん回り道しましたが、結果として土木へ帰ってきたと思いました。

結局、北大では、土木と建築と衛生と資源をなくし、大学院の構成を基盤工学と都市環境と資源環境という3つの専攻に切り替えました。

2つの教育システムをもっていることが大事。 複線化していないのが日本の教育の間違い。

●アンダーグラデュエートとグラデュエートをどう仕分けるかというのはものすごく大きな問題だと思うのですが、土木学会でもその対応をとっていかなければならないのかなと思います。重点化したあとほとんどの大学が教育システムを変えていないですね。

丹保 重点化大学と重点化していない大学は思考を変えるべきだと思います。逆に言うと、差別化するだけでなく、重点化大学というのは、学部は徹底的に基礎とLiberal arts（教養科目）をやるべきだと思います。そ

れから単科大学は徹底的に1年の時から土木の教育をやった方がいいと思うのです。そうすると4年生の時点では、土木としては単科大学の人の方が強いですよ。重点化大学の連中は土木のイントロダクションくらいしかやっていませんから、その時点では単科大学には勝てません。ところが、土木がもしLiberal artsであるなら、その後で積み上げ、整合した時に非常に大きな人間ができるのです。逆にいうと、単科大学で専門に徹した人間では足りない部分が出てきます。もっと大きくなろうと思ったら総合大学に入るなりして、教養を広げると。そういう2つのものが混じるということが、日本の将来に非常に大事だろうと思っています。もちろん、そこに差別が生じるのは困りますが、そういう2つの文化がある教育システムをもっているということが大事だと思うのです。行ったり来たりが大事で、場合によっては単科大学を含め、高専の人も高専が終わったらLiberal artsに入ってくればよいわけです。そのように複線化していないのが日本の教育の間違いだと思いますね。

外国で通用する土木にするためには、 しっかりした基礎と経験が必要。

●土木技術者に対して、現在、社会の目が少し変わってきています。ターニングポイントになっているのかもしれませんが、土木としてはこれまで公共事業主導型で来ました。そうすると技術者もなんとなくそちらに引きずられているようなところがあります。土木学会としても、倫理規定を作るなど、これからの土木の在り方を模索していますが、日本の土木に対しての会長なりのご意見はありますか。

丹保 これからは、甲と乙の世界があって、甲が乙を全部支配するということではなくなるでしょう。それは無理ですね。技術を自分で作ろうというときに、いかに土木がりっぱな仕事をして土木だけでは社会システムはつくれませんよね。だから広い民間の力が必要なのです。表現は悪いですが、私の時代にゼネコンへは勉強の嫌いな、元気のいい人が多いきました。いまは、クラスのトップでなければ入れませんよね。時代は変わったのです。どんどん新しいことをやりだすようになって、民間が続々と新しい技術を開発しています。その技術をどうやって評価して、どうやって買ったり売ったりするか、学会でも大きなテーマになっています。

いま産官学とっていますが、あれは本来、産学官なのです。官が真中に入るのはおかしいですね。官

というのは普通マネジメントしかしないものなのです。いまだんだんそうなっています。

私の専門領域である水道の分野でも、民営化が始まります。そうすると、日本の水道で東京都というのは、世界最大の水道業者です。ところが自衛隊と同じで、武器輸出三原則に引っかかってくるのです。技術を売れませんから、自分で開発した技術は自分で回収するしかないのです。そうすると技術開発がものすごく高くなります。そうすると、外から技術を買ってくるしかありません。いまフランスの民営の会社が入ってきています。ここは世界の水の10%くらいを抑えています。それは自分で研究開発のすごいチームを持っているからなのです。開発したものは自分のところでも使いますが、売って回収したお金でまた次の技術開発をやるのです。日本はそれができないのです。

たとえば、日本の冠たる土木技術でも、売ろうと思っても、ゼネコンが売る相手は国土交通省なのです。また、売るといっても仕方書やマニュアルがあり、がんじがらめで、他の多くの国で共通に使うというわけにはいきません。

子供たちに土木を見てもらい 興味を持ってもらうことが大切。

●最近、心配していることは、土木を希望する学生が減りつつあることです。いま土木を専攻しようとしている学生たちや、大学院、助手をやっているような若い人たちに対して、元気がでるようなメッセージはありませんか。

丹保 たとえば、電子工学とかいうのは、子供がそのものを見てよくわからないですよ。それに比べ、土木というのは見ればわかるでしょう。見ればわかるものを、これまで私達はほとんど子供たちにアピールしてこなかったことに気がついたのです。何年前かに土木で絵本を作りましたよね。あれはとっていい絵本だったと思うのですが、絵本だけではなくて、やっぱり土木学会の特に支部の活動に、本部がお手伝いしてあげて、子供たちに土木というのを見てもらったらいいと思うのです。そして、土木に対する興味をもってもらうことが大切だと思います。

それからもう一つ、先端というものはそうざらにあるものではないのです。ベンチャーなんてそんなにできるものではありません。いま先端とベンチャーがあるのは、バイオテクノロジーと、情報系位しかありません。われわれの分野は、200年間店ざらしにしてきた多くの技術や原理を、棚卸して、それを新しい思想



手前：丹保会長 奥：土木編集委員長

でどうやって使うかを考えることが大切であろうと思います。それがエンジニアリングです。ベンチャーというのはサイエンスで、要素主義です。要素主義からいったら鉄ができた時にもう要素原理は終わっているのですよ。コンクリートができた時に石の要素は終わっているのですよ。ですから材料の要素であと何ができるかといったら、あとプラスチックしかないでしょうね。

それと、土木に元気がないというのは、土木を縦割りのシステムの中で教育しているからではないでしょうか。土木はナチュラルサイエンスであり、エンジニアリングのオーガナイザーなのです。私自身はそういう発想で土木工学を習いましたし、事実、そのつもりになって長年取り組んできましたよ。コンピュータを使ってシミュレーションをやって、うまくできたから学会賞というのでは、それはちょっと違うのではないかと思います。

いまは、専門化してしまっ、電気や物理と同じ格好で土木を勉強しているのではないのでしょうか。ですからスケールの大きい人間が出て来難いのではないかと思います。

●反省としては、われわれも工学部の中で、対電気、対機械という格好になっていますので、それが学生に悪い影響を与えているかもしれないですね。土木としてはもっと違った教育に関する戦略があるかもしれないですね。

丹保 hydrodynamics だとか、力学であるとか、土質工学とか、それと計画学・設計学というのは、学科としてのベーシックですから、徹底的にシャープに鍛えなければいけないと思うのです。その代わり、水道工学とか河川工学というものを、やたら細かく教えてはいけないと思うのです。専門で講座が10あれば10等分

に教えなくてもいいと思うのです。ですが、力学と基礎学はみんなで早く教える。

そして、全部をトータルとして考えるとどうなるということを学ばせてあげたい。たとえば、卒業論文とか外へ行ってやるものはもうちょっとスケールが大きく、場合によってはプロジェクト型でやらせてみるとか。そして、あまり細かいこと言わない。単にそれだけでも、土木屋は大き目に育つと思いますね。

●最後にこれだけは言っておきたいということがありましたら、お願いします。

丹保 私は学生の頃は、山ばかり歩いておりました。現在 68 歳になりましたが、体力を養っておかないとだめということを感じますね。学問も大事ですけど、たいていのことにはへこたれないようにしておかないと

いけません。やっぱり、重い登山靴をはいて、山を歩いたという経験が大事ですよ。だから、若い人は、土木屋になるのだったら、コンピュータシミュレーションは数学で勉強すればいいのですから、あまり細かいことにこだわらないで、河川をやりたかったら川を歩けばいいんですよ。いまの人は川を歩きませんね。河川のシミュレーションをやって、どうなっているか。津波になったらどうなるということばかりやっているでしょう。それより海岸歩いて、どこの海岸がどのように侵食されていて、その先に川があって、砂が入っていなかったと、目で見た方がずっといいですよ。原点に戻ることも大切です。僕はそう思いますね。それに、土木屋はそれが学問の基本として許される環境にまだあると思うのです。

●長い時間、貴重なお話をありがとうございました。

プロフィールに変えて

丹保憲仁先生に米国環境工学アカデミーより外国人名誉会員資格を授与

今回、土木学会会長の丹保憲仁先生（前北海道大学総長／現・放送大学学長）が、米国環境工学アカデミー（American Academy of Environmental Engineers）の国際名誉会員に選ばれました。資格授与式は、首都ワシントンで開催された米国水道協会の年次研究発表会の期間中、6月17日に行われ、引き続き22日には、ランチセミナーの形式で丹保先生の受賞記念講演が行われました。丹保先生は、北海道大学、同大学院をご卒業後、1969年に北大教授に就任され、1995年からは北大総長、2001年からは現職の放送大学学長を勤められています。

先生の数多くの研究業績の中で、浄水処理における凝集の理論的研究、紫外線吸光度と溶存炭素濃度の比を用いた水質指標の提案は特に高く評価されており、これらの業績は今回の国際名誉会員選出の主な理由ともなりました。米国環境工学アカデミーとは、米国水道協会、米国公衆衛生学会、米国土木学会、米国環境工学・環境科学教授会、米国技術士会、北米廃棄物協会、水環境学会（WEF）、米国化学工学会、米国土木協会、米国環境教育協会、米国機械学会、および米国大気・廃棄物学会の12の学術団体からなる、環境工学分野で最も権威あるアカデミーであります。

同アカデミーの前身は1955年に設立された環境工学技術者の資格認定のための組織であり、米国における環境工学技術者の資質向上と、社会的な信頼の向上に寄与しています。同アカデミーが認定する環境工学技術者の資格は3種類に分かれて



おり、大学院新卒者レベルのIntern Environmental Engineer (IEE)、技術者資格を取得した後の技術者レベルのAssociate Environmental Engineer (AEE)、さらに技術士資格取得後8年以上の実務経験を有する技術者にはDiplomate Environmental Engineer (DEE)の資格があります。

なかでも国際名誉会員は、環境工学分野で国際的に極めて高い業績を有する研究者に与えられる資格であり、丹保先生への資格授与は、ドイツのE. H. Klaus R. Imhoff教授について2番目です。土木学会会員の1人として、また、同じ環境工学を専門とする日本人研究者の1人として、この度の丹保先生の栄誉を誠に喜ばしく感じております。

（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 滝沢 智・記）